



外来リハ通信 2017.9



第10回介助技術講習会を9月9日（土）に開催しました。
今回のテーマは、『コミュニケーション障害を支援するためのIT（情報技術）活用』
でした。

講師は、東京都作業療法士協会会長の田中勇次郎先生でした。先生は都立神経病院や都立多摩療育園などで、神経難病や重症心身障害児の方々のリハビリテーションに長く従事してこられました。

今回は、これまで作業療法士の立場から開発してこられた意思伝達装置や情報通信の機器について紹介いただくとともに、事例を通じたITの活用方法などについてご講演いただきました。



講習会の内容についてご紹介します。（先生のスライドを一部改変）

神経難病患者の特徴

- 神経難病とは・・・
神経の病気の中で、はっきりした原因や治療法がないもので、筋萎縮性側索硬化症、パーキンソン病、脊髄小脳変性症、などが代表として挙げられる
- 障害の特徴
自力では日常生活行為全般が遂行できなくなり、書けない、しゃべれない、身振り手振りができないなど、意思伝達手段が困難になるというコミュニケーション障害をきたす

介入事例～ナースコールが使えない～

運動機能の障害により、病棟に設置されているナースコールスイッチが利用できない問題

作業療法士がナースコールを改造し、利用できるように対応

手作りによるナースコールスイッチ利用者が増加

下にあるスライドは、神経難病患者の方がナースコールを利用できるように作成したスイッチの例です。残存している様々な身体機能を生かしてコミュニケーションが行えるよう、機器を工夫して支援を行っているとのことでした。

手関節固定装置に取り付けたスイッチ

手指の屈曲で操作する



静電容量タイプのタッチセンサー

左足母指がタッチ板に触れることで作動する



カセットテープケースを利用したスイッチ

股関節外旋（外側に回す）の動きにより、膝部外側がカセットテープケースを押し込む



介入の実際について、事例を通して説明していただきました。(先生のスライドを一部改変)

普通校に通った脊髄性筋萎縮症の一例

【対象者】

11歳の女の子(普通小学校5年生)

【症例紹介】

両親、祖母、弟の5人家族。身体機能は低下しており、両手指・両足関節が軽く動く程度。気管切開により人工呼吸器を使用しており、常にベッドに寝ている状態であり、日常生活行為はすべて介助が必要な状況である。知能は正常であり、コミュニケーションは、対面での簡単な受け答えで、瞬きをして「YES」と返答する。

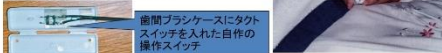
左の患者さんはコミュニケーションの手段に「瞬き」を利用しています。しかし、「瞬き」だけでは、コミュニケーションの範囲が限られてしまいます。

そのため、作業療法の目標として、**残存している手指の機能を利用したコミュニケーションの拡大**を目指すことになりました。

目標達成に向けた、様々なアプローチ

1) 操作スイッチの作製

- 手の大きさに合わせた操作スイッチを左右どちらの手でも使えるように2個作製した



前脚フランクケースにタクスイッチを入れた自作の操作スイッチ

2) TV用汎用型リモコンの改造

- TVチャンネルが変化することに興味を示したが、画面を注視することはなかった。



スイッチの作製や機器の改造により、コミュニケーション能力や生活範囲の拡大を支援

3) 手を使った活動

- 筆記具を持たせて介助して描くなど、自動運動を介助する形の動作体験を母親に指導
- 左右のクリックボタンだけで行うPCゲームなどを利用。介助しても両手を使うことに重点を置いてゲームを継続するように母親に伝えた。

4) 活動性を維持するための指導

- 両手指、両上肢、両足関節などの関節が固まらないよう関節の動く範囲を維持するための運動
- 表情を緩めるための顔面マッサージ方法を母親に指導

残存している身体機能の利用に向けた援助や家族指導

レッツチャットキッズ

- 外出時(学校など)の会話に利用するために、携帯用会話装置レッツチャットキッズを導入した(9歳)。



コミュニケーションに必要な機器の導入および使い方指導

IT機器活用の現状

- オペレートナビ
 - 学校の宿題: プリントアウトも自力で可能
 - 電子メール: 主に友人との会話
 - ホームページの閲覧: 好きなタレントのWebサイトなど
 - TV鑑賞: パソコン内蔵のTVを利用
 - TV番組の録画・再生: パソコンのHDDを利用
 - ゲーム
- レッツチャットキッズ(ピンク色)
 - 家庭や学校での日常会話

介入を行ったことでコミュニケーションが拡大するとともに、興味・関心も拡大し、多くのことが自分のできるようになりました。また、成長に合わせて機器の改良や工夫を行い、さらに家族の協力を得ながら取り組んだことも効果的でした。

介入の結果

今回の講習会には40名の申し込みがありました。IT(情報技術)の発展により、コミュニケーション支援機器は増加しており、講演ではたくさんの支援機器を紹介して頂きました。また、過去に支援機器を導入した経験や事例を通した話もあり、とても興味深いお話を聴くことができました。参加された方からもたくさんの質問と感想が寄せられ、コミュニケーション支援の必要性を実感した講習会となりました。

ご参加頂いた皆様の声はアンケート結果をご覧ください！！

